

## IMFとBOJ

ワールドカップラグビー、TPP、ノーベル賞、トヨタの自動運転。期待に沿ったあるいは期待以上の成果を上げる日本に対して、世界では見直し気分が生まれようとしている。

この機に乗じて日銀も期待以上の緩和策を打ち出せば世界を覆う重苦しい雰囲気にも風穴を開けることもできるだろう。この際、量的緩和策がマクロ経済にどれほど効果があるかなどと疑念を挟んではいけない。最初から不確かな政策だったのだから。

一方で世界には別の冷たい風が吹いているところがある。IMF周辺だ。

IMFは今年の世界経済の見通しを下げた。IMFは4月と10月の年二度世界経済の見通しを立てているが、3.5%から3.1%に下げた。ブラジルやインドなど新興国や、米国や日本など先進国の多くも下げた。ただ中国のGDPは6.8%のまま据え置いた。不思議なことにIMFは中国に対しては市場よりもポジティブな見方をしている。

さらにIMFは3.1%の成長もドル建てで計算すればマイナス成長になるとの分析もしている。ドル高のためだ。

IMFはこれまでも専務理事が再三、米国の利上げの延期を求めてきた。新興国からの資本流出や企業のドル建て債務の増加で、米国の利上げが新興国企業の倒産や通貨危機を招くことを懸念してのことだ。

IMFの世界にどっぷり浸っている者はネガティブな見方を取らざるを得ない。

だがIMFがまとめている世界の外貨準備高の統計を見ると、昨年第三四半期から減少を続けてきた新興国の外貨準備が今年第二四半期に歯止めがかかった可能性がある。外貨準備が5千億ドル以上減少したのは初めの大きな変化だったので、これが人々の認識や投資行動に大きな影響を与えたのは当然だが、その変化が止まった可能性がある。

最近のブラジルレアルやトルコリラを始めとする大きく下落した新興国通貨が戻しているのもこうした変化を反映しているのかもしれない。もちろん単にコレクションの可能性もある。それを確かめるのは第三四半期の統計が必要になるが、それには3か月待たなければならない。

そこで後は仮説の勝負になる。IMFの冷たい風に賭けるか、新しい変化に賭けるかだ。その変化は日銀の新たな追加緩和政策が絶好の追い風になるはずだ。黒田さん、四の五の言わず、今がチャンスです。